

1. 授業評価の目的

本報告書は、関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科において2007年度秋学期に開講した授業についての評価アンケート結果をまとめたものである。これまでの「授業評価アンケート結果報告書」と同様に、本報告書の構成は、2007年度秋学期授業評価アンケート結果概要・分析、授業評価アンケート実施科目一覧、授業評価アンケートフォーム、アンケート結果（アンケート授業別集計結果（サンプル））およびグループ・インタビュー調査結果（抜粋）からなっている。

授業評価アンケートの実施とその結果の分析等は、教育研究水準の継続的な向上のためのひとつの方策として行っているものである。

授業評価アンケートは、専門職大学院制度の創設を主たる柱とした「学校教育法の一部を改正する法律」（2002年）が、大学の質に関する新たな保証システムを導入したことと深く結び付いている。この学校教育法の改正は、(1)設置認可制度の見直し、(2)大学に対する第三者評価制度の導入および(3)違法状態の大学に対する是正を要請することで、この保証システムを機能させることに狙いがあった。このなかで、大学に対する第三者評価制度の導入は、自己点検・評価とともに教育研究水準の継続的な向上を目的としたものである。とくに、専門職大学院の教育研究活動の状況については、大学は文部科学大臣の認証を受けた評価機関による評価を定期的に受けることを求められている。

教育研究水準の向上との関わりでいえば、本学は「授業を通じた知的活性化」を全学的目標として掲げている。また、本学の専門職大学院経営戦略研究科は、教員の資質維持向上の方策のひとつとして、「授業内容及び方法の改善を図るための組織的な研修等の実施に関する対応」に取り組んでいる。具体的には、受講生による授業評価の実施、専門委員会の設置による授業方法の検討と提言および研究会や講習会等の実施である。受講生による授業評価は、授業評価アンケートを通じて授業に対する認識やその反応を捉え、その分析結果を授業担当者にフィードバックすることで教員の資質や教育の質的向上を図ることを目的とするものである。また、受講者に対する授業評価アンケートとともに、授業担当者に対しては担当科目の自己評価（「教員の担当科目自己評価表」の記入）を実施しており、授業の両当事者の評価は教育研究水準の継続的な向上に役立つものと期待している。

授業評価アンケートの設問は、あらかじめ設定済みの18問（このうちの1問は、とくに会計専門職専攻における公認会計士試験の受験対策との関わりについて問うたものであるため、授業科目によっては回答すべき設問から除外している）と担当教員の指示のもとで設定しうる設問の計19問並びに自由記述3問からなる。各設問は、賛否の程度による5つの選択肢より回答する形式（1を最低点、5を最高点とするスケール方式）を採用している。

2007年度秋学期における受講生による授業評価は、これまでと同様に、昨年企画、作成された調査票を活用して実施した。また、授業評価アンケートの集計結果の分析と本報告書の作成についても、昨年と同様に、本経営戦略研究科教授会のもとで設置された「経営戦略研究科自己評価委員会・授業評価・FD部会」が行った。

受講者からの生の声は、授業内容および方法の改善をはじめとした教員の資質維持向上

への直接的な源泉であり、今後の糧となるものである。授業評価アンケートの回答を通じて貴重な意見を寄せていただいた受講生諸君に感謝申し上げます。また、唯でさえ体系的に組まれたカリキュラムのもとで限られた貴重な授業時間であるにも関わらず、授業評価の目的と趣旨を理解し、所定の時間内に授業評価アンケートと担当科目の自己評価を実施していただいた担当教員各位に謝意を表す。併せて、授業評価アンケートの実施に際して、調査票の発送・回収・整理などの事務作業にあたられた経営戦略研究科事務室にもお礼を申し上げたい。

2. 調査実施方法および期間

本経営戦略研究科は、授業内容については、春学期・秋学期の授業終了時に受講生による授業評価を実施している。授業評価アンケートの実施方法や実施期間等については、以下のとおりである。

(1) 実施対象授業科目について

授業評価アンケートを実施した授業科目は、原則的に 2007 年度秋学期に開講されたすべての科目であり、2007 年度夏季集中科目を含んでいる。本経営戦略研究科全体でみた場合、アンケート実施対象科目は 132 科目である。その内訳は、経営戦略専攻が 54 科目、会計専門職専攻が 78 科目であった。

現行カリキュラムのもとで、授業科目はコア科目群、ベーシック科目群およびアドバンスト科目群に分類されており、当該授業科目の性格上、複数クラスを開講している科目もある。したがって、授業評価アンケートを実施対象クラスでみた場合、本経営戦略研究科全体で 152 クラスであった。その内訳は、経営戦略専攻が 62 クラス、会計専門職専攻が 90 クラスである。

(2) 回答者、回答率等について

本経営戦略研究科における 2007 年度秋学期の授業評価アンケート調査実施対象授業科目の履修者数は 2,580 人で、実際にアンケート調査を回答した者は 2,155 人であった。つまり、アンケート調査の回答率は 83.5% であったことを意味する。

各専攻別の内訳は次のとおりである。経営戦略専攻の授業科目の履修者数は 1,029 人で、アンケート調査の回答者数は 827 人であった。回答率は 80.4% である。また、会計専門職専攻の授業科目の履修者は 1,551 人で、アンケート調査の回答者数は 1,328 人であり、その回答率は 85.6% であった。

(3) 実施期間について

設置認可申請書に明記したように、授業評価は、春学期、秋学期の授業終了時に実施することとしている。したがって、2007 年度秋学期の授業評価アンケートの実施期間は、第 3 クォーター開講科目については、2007 年 11 月 6 日（火）～11 月 19 日（月）の最終

授業時に実施した。補講を実施した科目については、最終授業時となる 11 月 13 日（火）～11 月 20 日（火）に実施した。

また、第 4 クォーター開講科目については、原則的に 2008 年 1 月 16 日（水）～1 月 22 日（火）の最終授業時に実施した。補講を実施した科目については、最終授業時となる 1 月 23 日（水）～1 月 31 日（木）に実施した。

（4）アンケートの実施について

授業評価アンケートは、次の手順で実施した。

- ①授業評価アンケート時間は、最終授業時の授業終了前 15 分間とする。
- ②最終授業開始前に、授業評価アンケート用紙と「教員の担当科目自己評価表」の入った封筒を、経営戦略研究科事務室にて担当者氏名と担当科目を確認のうえ受け取る。
- ③最終授業開始時に、「授業終了 15 分前に授業を終了し、授業評価アンケートを実施する」旨を受講者に伝える。
- ④授業終了 15 分前に、授業担当者は授業評価アンケート用紙を受講者に配布し、その場で直ちに回答するよう指示する。当該用紙の配布および回答の指示後、学生の自由な回答・記入を促進するため、授業担当者は教室から退室する。同時に、授業担当者は研究室や講師控室等にて「教員の担当科目自己評価表」の記入を行う。

なお、「教員の担当科目自己評価表」は、次のような自由記述形式の 5 つの設問からなっている。

1. 「この科目を担当するにあたって最も力を入れたことは何ですか。」
 2. 「この科目を担当し終えて受講学生の反応はどうだったと思いますか？ クラスで実施した小テストやレポートの内容、発問に対する学生の答え、学生の教員への質問などから総合してお答えください。」
 3. 「この科目を担当するにあたって当初予定していた目標や、授業で最も力を入れたことを踏まえて、ご自身の思っていた目標は達成されたと思いますか？」
 4. 「この科目に対しては学生の評価が行われますが、学生に最もアピールしたと思われる点はどこですか？」
 5. 「この科目を担当するにあたって今後、改善ないし工夫をした方がよいと考えている点があればお書きください。」
- ⑤授業終了後、授業担当者は教室に戻って授業評価アンケート用紙を回収し、記入済みの「教員の担当科目自己評価表」とともに所定の封筒に入れて事務室に返却する。なお、授業担当者は授業評価アンケート用紙の回収時および回収後、受講者の自由な回答を促進するためにも、当該アンケートは閲覧しない。

（5）集計

2007 年度秋学期の授業評価アンケートについては、実施授業科目のクラスごとに集計を行った。この「授業評価アンケート授業別集計結果」は、各授業クラスの履修者数、回答

者数（学年別、所属専攻別、出身学部別の回答者数）、各設問の有効回答数、有効回答数の平均値および専攻平均値が示される。このうち、各設問の有効回答数の平均値と専攻平均値は、レーダーチャートによって視覚的にも明示している。

授業評価アンケートには、自由記述に関する設問が3問ある（「この授業で良かったところを具体的に書いてください」、「この授業で変えてほしいところがあれば、具体的に書いてください」および「この授業に関連して気づいたことがあれば書いてください」）。学生による授業評価アンケート実施にあたっての基本的スタンスとして踏襲してきたように、この自由記述の回答内容については公表対象とせず、授業内容および方法の改善のための資料と資する目的から、授業担当者に配布している。

3. 経営戦略専攻企業経営戦略コース

A. 学生による授業評価アンケート

(1) 概観

学生の授業評価に関する調査の方式は、授業内容や自己の学習態度など18個の設問に、学生が5段階評価で答えるというものである。今回見られた全体としての傾向は、前期である2007年度春学期に比較して、ほとんどの項目で0.1ポイントから0.3ポイント程度、評価が向上していることである。開学当時から1年ほどは、このような数字の向上は見られていたが、それ以来ともいえる。特に、学生から教員の授業に対するの評価項目において、0.2ポイントから0.3ポイント向上している項目が多々見られる。学生自身による予習復習についての項目（設問11,12）は、それぞれ0.1ポイントのアップであった。この数字の解釈であるが、今回1回だけで判断するのは難しいと考えられる。学生の授業への評価が高まったのかもしれないが、今回の評価者が相対的に高めの評価をする傾向があった可能性もある。したがって、授業の質が向上しているかどうかは、次の結果を見て判断すべきであると思われる。

(2) 設問項目について

学生による評価アンケートは、設問1から設問10が「教員の授業内容と方法」について、設問11と設問12が「学生自身の取り組み」について、設問13から設問15が「授業の全般的評価」についてであり、設問16と設問17は、コア、ベーシックおよびアドバンストの科目区分（科目群）との目的整合性について、また設問18は公認会計士試験対策としての役立ちについてのものであった。

(3) 全般的評価について

以下では、質問内容別の全般的評価を見ていく。「教員の授業内容と方法」への評価に対する質問（設問1から設問10）についての平均は4.43であった。前期に比較して、0.16ポイントの向上が見られた（推移や差異を明確にするため、小数点第二位まで表記している）。「学生自身の取り組み」（「学習への事前準備」）に対する質問（設問11と設問12）に

ついでに平均は 3.85 であった。前期に比較すると 0.1 ポイント高くなっており、開学以来最も高い数字となっているが、それでも 3 ポイントの後半にとどまっている。「授業に対する満足度」に対する質問（設問 13 から設問 15）についての平均は 4.3 であり、前期よりも 0.13 ポイント高くなっており、こちらも開学以来最も高いポイントとなっている。コア、ベーシックおよびアドバンスの科目区分との関連性（設問 16）については 4.3 であり、前期と比較して 0.2 ポイント向上している。コア、ベーシックおよびアドバンスの科目区分別の目的整合性（設問 17）については 4.3 であり、前期よりも 0.3 ポイント上がっている。前回から引き続き、学生から教員への評価は 4 ポイント台で相対的に高い評価を得ている。それに対して、学生自身の取り組みの数字は 3 ポイント台の後半であり、教員の努力によって、改善する可能性があると考えられる。

<学生評価の推移>

	2005 年度 春学期	2005 年度 秋学期	2006 年度 春学期	2006 年度 秋学期	2007 年度 春学期	2007 年度 秋学期	前期 比較
教員の授業内容と方法 (設問 1～設問 10)	4.14	4.19	4.24	4.26	4.27	4.43	+0.16
学生自身の取り組み (設問 11～設問 12)	3.45	3.65	3.70	3.80	3.75	3.85	+0.10
授業に対する満足度 (設問 13～設問 15)	3.80	3.90	4.07	4.03	4.17	4.3	+0.13

(4) 個別項目について

個別に見た場合、今回は 0.1 ポイントから 0.3 ポイント程度と微増ではあるが、評価が上がっている項目が多く見られる。また、学生側から教員側を評価した項目は相対的に高いポイントとなっている。「教員の授業内容と方法」評価の中では、「シラバスとの整合性」(設問 1) が 4.6、「教員の準備」(設問 2) が 4.5、「教員の専門知識の高さ」(設問 3) が 4.6 であり、前期に引き続き高い数字となっている。5 段階評価ということを考えれば、十分に高い評価を得ていると考えられる。相対的に低い項目は、「教員は個々の学生の内容理解の水準を考慮していたか」(設問 6) の 4.2、「課題の量は適正か」(設問 7) 4.3、「授業内容と時間配分の適正さ」(設問 8) は 4.3 である。問題があるといえるほどの数字ではないと考えられるが、改善の余地はあるのかもしれない。

<項目別の学生評価推移①>

	2005年度 春学期	2005年度 秋学期	2006年度 春学期	2006年度 秋学期	2007年度 春学期	2007年度 秋学期	前期 比較
設問 1	4.3	4.4	4.4	4.4	4.4	4.6	+0.2
設問 2	4.3	4.4	4.5	4.5	4.4	4.5	+0.1
設問 3	4.5	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	±0.0
設問 4	4.1	4.2	4.1	4.2	4.2	4.4	+0.2
設問 5	4.2	4.1	4.2	4.3	4.3	4.4	+0.1
設問 6	3.8	3.8	3.9	4.0	4.0	4.2	+0.2
設問 7	4.0	4.0	4.0	4.0	4.1	4.3	+0.2
設問 8	3.6	4.0	4.0	3.9	4.0	4.3	+0.3
設問 9	4.4	4.3	4.4	4.4	4.4	4.5	+0.1
設問 10	4.2	4.2	4.3	4.3	4.3	4.5	+0.2

「学生側での予習・復習」(設問 11) は、3.9 ポイントで、前回より+0.1 ポイントであった。「授業を受けるに当たっての文献探査」(設問 12) は 3.8 であり、こちらも前期と比較して+0.1 ポイントとなっている。3 ポイント後半に落ち着きつつあるが、前述のように、教員の指導のしかたによって改善の余地はあると考えられる。

<項目別の学生評価推移②>

	2005年度 春学期	2005年度 秋学期	2006年度 春学期	2006年度 秋学期	2007年度 春学期	2007年度 秋学期	前期 比較
設問 11	3.5	3.7	3.7	3.8	3.8	3.9	+0.1
設問 12	3.4	3.6	3.7	3.8	3.7	3.8	+0.1

「授業が全般的に満足いくものであったか」(設問 13) は 4.4 であり、前期比較で+0.2 ポイントとなっている。「分析力や批判力の獲得」(設問 14) は 4.2、「この授業を他の学生にも薦めたいか」(設問 15) は 4.3 であった。それぞれ、前期比較で+0.2、+0.3 ポイントとなっており、評価が高くなっている。

<項目別の学生評価推移③>

	2005年度 春学期	2005年度 秋学期	2006年度 春学期	2006年度 秋学期	2007年度 春学期	2007年度 秋学期	前期 比較
設問 13	3.9	4.0	4.2	4.1	4.2	4.4	+0.2
設問 14	3.6	3.8	3.9	3.9	3.9	4.2	+0.3
設問 15	3.9	3.9	4.1	4.1	4.1	4.3	+0.2

「その分野の基礎的な内容をカバーしているか」(設問 16) に対しては 4.3 ポイント、「初学者に対しても配慮されたものだったか」(設問 17) は 4.3 ポイントで、それぞれ前期と比較して+0.2、+0.3 ポイントとなっている。

＜項目別の学生評価推移④＞

	2005年度 春学期	2005年度 秋学期	2006年度 春学期	2006年度 秋学期	2007年度 春学期	2007年度 秋学期	前期 比較
設問 16	4.0	4.1	4.1	4.2	4.1	4.3	+0.2
設問 17	3.8	4.0	4.1	4.1	4.0	4.3	+0.3

B. 担当教員による授業自己評価アンケート

ここでは、コア科目、ベーシック科目、アドバンスト科目(課題研究基礎・課題研究を除く)、課題研究基礎・課題研究に分けて、回答の傾向を分析・考察し、最後に前回アンケート結果報告との比較も行っている。

(1)コア科目

コア科目において「最も力を入れたこと」は、「意義を理解してもらう」「基本概念をビジネス経験と結び付けて理解させる」ことなどである。コア科目は必修科目と必修の性格が強い選択必修(4科目から3科目選択)からなるため、毎回指摘されることだが、熱心に取り組む学生と「履修意欲が強い」学生との格差が出る。それに対しては、「受講者の関心と理解の度合いにあわせて講義する」「小テストを実施することで自然と予習、復習効果」「時事的な話題」などの学生の興味を引く工夫がなされていた。多くの教員が当初の目標が「達成された」「ほぼ達成された」と考えているものの、「今後の改善点」として、「受講生とのやり取り、講義の中でQ&Aを増やす」「理解の程度差への対応」などを課題に挙げていた。

(2)ベーシック科目

「最も力を入れたこと」は、「基本的概念の理解」および「実践への応用力を身につける」ことが多い。

「受講学生の反応」は、「おおむね良好」とする教員が多い。その理由として、「大変よく調べたグループ発表が多かった」「課題に熱心に対応し、その中で理解を深めてもらった」「最終的な課題発表に真剣に取り組んでいた」と学生側の熱心さ・真剣さを評価する科目が多かった。その陰には、「予習－講義－その場で復習－レポートで復習というループを作った」「補講の他に質問日を設け、細かい質問に対応した」「課題のフォローを個々に行う」などの教員側の工夫があるのだろう。その一方で、「関心の深い学生とそうでない学生の格差はかなりある」「全体として興味深く学んでくれたようだが、初めて学ぶ学生にとって概念の体系化に苦しんだと思われる」と学生側が二極化している状況を指摘する科目があることは前回アンケート時と変わらない。もともと履修意欲の強い学生や初めて学ぶ学生に対してどう対処するか、上記の教員側の工夫で乗り越えられるものなのかどうか課題となっている。

「今後の改善点」として、「レジュメを工夫して問題等を作成しわかりやすい授業を行う」、「教材をもっと準備する」という、春学期までに挙げられてきた授業内容を充実させるための工夫はやや少なくなっていた。後述するように、ビジネススクールでの教歴が長くなって、ある程度自信をもって授業運営を行っているのだろう。その他に、「時間内にプレゼン

をさせる工夫」や「レポートにおいて、基本的なビジネス分析の手法について改めて説明する機会を持つ方がいい」といった授業以前の基本的な課題が出ていた。受講生の人数によって授業の運営は異なるため、「人数が多い場合のディスカッション」は依然として課題に挙げられていた。

(3)アドバンスト科目

「最も力を入れたこと」は、コア科目やベーシック科目と連動する科目については、「専門的なコンセプトと現実の経験を結び付けて理解すること」「最新事情を論理・体系付けてわかってもらうこと」など、理論を用いて現実に役立てる能力を涵養することが挙げられた。アドバンスト科目の中でも「難解な部類に属する」科目については、「基本理念、原理原則を理解してもらうこと」が多い。これらの目的のために多く取られた工夫が、ケース・ディスカッション、ゲストの招聘や最新事例の紹介などで、その他に、「受講生が積極的に参加できるような授業にするため、どのようなトピックスに敏感に反応するか、見極めることに注力した」、「見学を授業に組み込み、理解を深めてもらうことにした」などがあつた。

「学生の反応」は、「良かった」「受講生の眼は輝いていた」「活発に参加してくれた」と肯定的に捉える教員がいる一方で、「理解が進んだが、体系的な知識網までなったか疑問」「基本的法律の素養の有無によって理解にバラツキあり」「発表レベルにムラがあり、伝わりきらない面も反省」などと評する教員も少なからずいた。

「目標の達成度」では、「達成された」「ほぼ達成」とする教員が半数を超えるが、「インターネットの発達等で情報量が増えているためよく調べてくるのだが、思考力・感受性は想像を下回るものがあり、目標の60%達成」「予習してきた学生、実務で意識の強い学生に対しては目標が達成された」と達成度を限定的に捉える教員もおり、また「少し準備不足であった」など教員側の準備不足を反省する教員もいた。

「学生に最もアピールした点」は、「ゲストスピーカーの適切な招致、講義テーマの新鮮さ」「わかりやすさとケースの多彩さ」「前回の講義の復習の時間を取り、知識の定着を図るようにした」「授業のフィードバックと板書」「1回の講義の後半に、学生が興味を持っている事項に集中して講義を展開」「PC 実習した点」など挙げられており、様々な具体的な工夫がなされていることが窺える。

「今後の改善点」として、「ゲストスピーカーの講義を入れたため、担当教員が取り上げた事例が少なくなった点」「わかりやすく説明しようと努めるあまり時間オーバー」「ディスカッションの時間配分」「講義したい内容が質量ともに豊富にあり、2単位では消化不良もありそう」などが挙げられ、限られた時間内でどう授業内容を充実させるかに悩む教員は多い。「事前学習」など学生側の努力をどう促し学習効果につなげるかも課題に挙がっていた。

(4)課題研究基礎・課題研究

この2科目は、1~9名と少人数で学生に対してより密接な指導を行うという点で他のアドバンスト科目と性質を異にし、「受講生の反応」も「目標の達成度」もおおむね高いと考え

る教員は多い。しかしながら、その中でも受講生が 7~9 名のクラスでは、「夏休み前に初回授業を行い、早めのスタートを切った」「毎回 A4 で 2 枚ずつ書いてもらう」などの工夫が見られるものの、人数が多くて「議論が遠慮がちなる」「一人当たり発表時間が短く、個別指導という点では不十分」の他、「常時遅れてきて自分の発表だけを行う不届き学生が 3-4 名おり問題であった」などの問題が指摘され、「科目あたりの人数の制限が望まれる」との要望もあった。その他に、「半年は短い」「早めのクラスを開始することで分析時間を確保すること」「学生の研究志向に合わせた知識・経験・理論蓄積がないため十分な指導ができず、指導を断る方がよい場合もあるので、課題研究計画書の提出があった時点で、履修希望学生と連絡を取り相談できるシステムに変更すべき」などが今後の改善点に挙げられた。

(5) 前回報告との比較

春学期のアンケート結果報告では、ビジネススクールでの教歴の長短による違いが見られた。今回は、少なくともすでに春学期を経験している点で教員は何らかの IBA での授業経験を積んでいるためか、全員がそれまでの授業経験を活かしていると考えられる。今後の改善点として、「特になし」あるいは記載のない教員がいる他に、「常に PDCA(Plan-Do-Check-Action)を回転し続けること」「新たな単元を取り込む」など、現状ではよいものの状況に応じて変えていこうと考えている教員もいる。また、非常勤教員より、前学期での改善要望が叶って「クラスサイズが小さくなってよかった」「基礎的なコースを履修した上での受講を案内していただいたおかげで、スムーズに講義に入ることができた」との評価があった。小さなことでもできることから改善を積み重ねることが今後必要なことである。

4. 会計専門職専攻

A. 学生による授業評価アンケート

(1) 概要

学生による授業評価アンケートは、①教員の授業内容と方法について、②あなた自身の取り組みについて、③授業の全般的評価について、④コア、ベーシックおよびアドバンストの科目区分並びに公認会計士試験への役立ちなどについての 18 項目の設問に、学生が 5 段階評価で答える方式である。

(2) 設問項目について

学生による授業評価アンケートは、経営戦略専攻の「学生による授業評価アンケート」でも明記したように、設問 1 から設問 10 が「教員の授業内容と方法」について、設問 11 および設問 12 が「あなた自身の取り組み」について、設問 13 から設問 15 が「授業の全体的評価」についてであり、加えて、設問 16 から設問 18 が、コア、ベーシックおよびアドバンストの科目区分(科目群)の適切性、公認会計士試験対策としての役立ちについて問うものである。

(3) 全般的評価について

今回の 2007 年度秋学期のアンケート結果における会計専門職専攻平均値は、2007 年度春学期の平均値より少し上昇した。また 2005 年度春学期から、ほとんどの設問項目で専攻平均値が上昇傾向にある。

専攻平均値は、すべての設問の評点をのべ回答人数で平均したものであるが、2005 年度春学期から 2007 年度秋学期にかけての専攻平均値の推移は、次の通りである。

<すべての設問に対する総平均値の推移>

	2005 年度 春学期	2005 年度 秋学期	2006 年度 春学期	2006 年度 秋学期	2007 年度 春学期	2007 年度 秋学期
総平均値	3.9	4.2	4.2	4.3	4.3	4.5

今回の調査を設問ごとにみても、評点が 4.0 ポイント未満の結果となったのは、設問 12 「この授業を受けるに当たって自分から文献を探すなどの努力をしましたか」だけであった。設問 11 「この授業を受けるに当たって十分な予習や復習を行いましたか」は、前回の 2007 年春学期では 4.0 ポイント未満であったが、今回は 4.0 ポイントであり、少しではあるが評価点が上がった。この会計専門職専攻平均値が、最近徐々にではあるが上昇傾向にあることは、教員と学生が一体となった授業に対する取り組みによるものと考えられ、また学生が課程修了のため、もしくは公認会計士試験の受験に備えて、より勉学に積極的に関わっていたということによっているものと思われる。

評点が 4.5 を超える高い評価を得た設問は、設問 1 「授業の内容は、シラバスで示された主題や目的に十分沿っていましたか」、設問 2 「教員は十分に準備して授業に臨んでいましたか」、設問 3 「教員は、担当科目の授業を行うのに十分な専門的知識を持っていましたか」、設問 4 「授業で指定された教科書や配布された資料は、学習の助けになりましたか」、設問 8 「授業の内容と時間配分は適正なものでしたか」、設問 9 「教員は学生の質問に丁寧に答えていましたか」、設問 10 「この授業は将来の学習にとって有意義なものでしたか」、および設問 13 「この授業は全般的に満足 of いくものでしたか」、設問 15 「この授業を他の学生に勧めたいと思いますか」、設問 16 「授業内容はその分野の基礎的な内容をカバーしているものでしたか」であった。なかでも設問 1、設問 2、設問 3 は、毎回きわめて高い評価を得ている。また、設問 4、設問 8、設問 9、設問 16 は、少しではあるが前回の 2006 年秋学期と比べて評価が高まっており、教員の授業の進め方についての対応も整ってきているものと考えられる。設問 10、設問 13、設問 15 は授業の総合的評価に関わるもので、この評価が高いということは、全般的に授業に満足している学生が多いということの意味していると思われる。

しかしその反面、評価点が 4 ポイント以上ではあるがやや低いのは、設問 5、「教員は学生が発言したり議論することに十分な配慮を払いましたか」、設問 6 「教員は、個々の学生の内容理解の水準を考慮していましたか」、設問 7 「この授業で与えられる課題の量は適正

なものでしたか」、設問 14「この授業を受けることで分析能力がついたと思いますか」、および設問 17「授業内容は初学者に対しても配慮されたものでしたか」、設問 18「この科目は、公認会計士試験の入門的な受験対策として、役に立ちましたか」であり、教員の今後の重要な課題になっている。ただ前回と比べて、それらの項目についても評価点が上がっており、教員の授業方法の改善がみられる。

2005 年度春学期のアンケート開始以来一貫して上昇しているのは、設問 1 と設問 10 である。教員の授業上の工夫に関する努力については、着実に実を結んでおり、良好な評価を得ていることがわかる。

このように、全般的に良好な評価ではあるもの、学生自身の取り組みに関する設問 11 や設問 12 の評点は、4.0 および 3.9 の水準であり、確かに評価を伸ばしているものの、2005 年度春学期から通しても大きくは動きがないのも実情である。これらは、学生による授業評価アンケートに対して学生が慎重になっているという特徴を示すものではあるが、今後の課題を窺わせるものでもある。

(4) 個別項目について

上記のように、2007 年度秋学期は、評価点実数でも良好であった。「教員の授業内容と方法」を問う設問 1 から設問 10 についてみると、設問 1 から設問 4 および設問 9 と設問 10 は、「そう思う」と「だいたいそう思う」の回答が占める割合が 90%～98%となっており、それ以外の設問 5 から設問 8 では 84%～88%となっている。つまり、ほとんどの学生が肯定的に捉えており、会計専門職専攻開設以来の教育面での一定の成果といえることができるだろう。今後は、学生の議論や理解の支援、課題の負荷および授業の時間配分について、より一層の研鑽を期待したい。

「学生の取り組み」を問うた設問 11 および設問 12 の評価点のこれまでのアンケート調査結果の推移は、次の通りである。

<学生の取り組みに対する評価点の推移>

	2005 年度 春学期	2005 年度 秋学期	2006 年度 春学期	2006 年度 秋学期	2007 年度 春学期	2007 年度 秋学期
設問 11	3.6	3.7	3.7	3.8	3.9	4.0
設問 12	3.4	3.5	3.6	3.7	3.7	3.9

また設問 11 と設問 12 について、回答者総数に対する「そう思う」と「だいたいそう思う」と答えた学生の割合の推移は、次の通りである。

<「そう思う」と「だいたいそう思う」と答えた学生の割合の推移>

	2005 年度 春学期	2005 年度 秋学期	2006 年度 春学期	2006 年度 秋学期	2007 年度 春学期	2007 年度 秋学期
設問 11	60%	65%	64%	63%	68%	72%
設問 12	49%	59%	53%	57%	59%	66%

このような評価の上昇は、「教員の授業内容と方法」の設問 7 とも関連があるが、学生への負荷を学生の主体的関わりを生かしつつ増加させていくことも考慮すべきであると思われる。

「授業の全体的評価」を問うた設問 13 から設問 15 については、本来は、授業評価の結論としての指標となるべきである。設問 13 と設問 15 の評価点は 4.5 で、まずまずの評価点であるものの、設問 14 の評価点は 4.4 と少し低かった。ただこれらのどの項目も前回と比べると、わずかではあるが評価点が増えていた。設問 14 に対する回答のなかで、「そう思う」と「だいたいそう思う」が占める割合は、それぞれ、84%であり、必ずしも「教員の授業内容と方法」での高い評価点の加重平均から推測されるものとはなっておらず、現段階で、十分に高い水準にあるとはいえない。このような点を改善した「授業の全体的評価」への取り組みが今後必要であり、これは、一つに「学生の取り組み」に対するも教員の対応に関わっていると考えることができる。

(5) 科目区分・公認会計士試験への役立ちについて

「コア、ベーシック、アドバンストの科目区分との目的整合性」を問うた設問 16 から設問 18 の評価点は、それぞれ 4.5、4.4、4.2 であり、「そう思う」と「だいたいそう思う」が占める割合は、それぞれ、86%、83%、78%であった。特に、設問 18 などは、まだまだ十分な対応がなされていない。これらのことは、適格な履修モデル体系の構築と運営が求められるのであり、今後の重要な課題と位置づけられよう。

B. 担当教員による授業自己評価アンケート

(1) 各質問項目の回答傾向

- ① 「この科目を担当するにあたって最も力を入れたこと」を問う設問 1 に関して、コア科目については、次のステップにつながるよう担当科目の「基礎的な知識の修得」もしくは「体系的な理解」を意識した回答に、ベーシック科目については、担当科目の「理解」を図ること、「論理的な思考」あるいは「解かりやすい講義」という回答に、アドバンスト科目については、科目の性質（公認会計士試験科目・事例研究・自治体関係）に応じた回答がなされているが、「理解の促進」、「応用的能力の開発」、「実務的に応用」という回答に類型化される。
- ② 「受講学生の反応」を問う設問 2 に関しては、講義時において学生の意欲や積極性を感じているとの回答が多いが、「まあまあ」、「普通」との回答も散見される。ただし、「理解が今一步」、「理解度に個人差がある」とした、反応を理解度と捉えた回答もある。
- ③ 「当初の目標達成度」を問う設問 3 に関しては、「達成できた」、「おおむね達成できた」との回答が大半であるが、受講学生の目的意識の相違（公認会計士志望か否か）や時間的制限により一部内容を省略したことから「不十分」とした回答も若干ある。目標達成度を学生が到達すべき水準と捉え、自習の程度により達成した学生とそうで

はない学生がいるとした回答も散見される。

- ④ 「学生に最もアピールした点」の設問 4 に関しては、「講義と演習の活用の方法」, 「課題の活用の方法」, 「講義内容の特徴を踏まえた講義方法」, 「配布資料」, 「思考方法」, 「実務経験に基づいた講義」, 「最新のトピック」等, 講義の手法に関する回答が大半であるが, 抽象的な回答に留まっているものがある。「特になし」とする回答も散見される。
- ⑤ 「今後の改善点」を問う設問 5 に関しては, 設問 3 について「達成できた」, 「おおむね達成できた」との回答に対しても, 「演習時間の確保などの時間配分」, 「事例の活用」, 「教材の開発・ブラッシュアップ」等, さらに改善点を挙げている回答が大半であるが, 「特になし」とする回答も散見される。

(2) 教員の自己評価表における全体的傾向

会計専門職専攻教員の担当科目自己評価表から整理できる全体的な傾向としては, 以下の点である。

- ① 達成目標に関しては, 担当科目についての基本的な知識の習得とこれを踏まえた体系的な理解を重視して設定され, また, 教員相互において関連科目が把握されており, その科目群の体系的な理解を重視して達成目標が設定されているように思われる。
- ② 学生の意欲, 積極性を感じているとする回答が大半であり, そして, 当初の目標達成も, 「達成できた」, 「おおむね達成できた」との回答が大半であることは, 良好な講義環境が築かれていることをうかがわせるものと言えよう。また, 科目に対する達成目標を達成するための方針, 方策, 工夫などの具体的な記述がなされているとともに, これまで同様, 学生の理解度をより高めるために, 今後も, 授業方法の改善・工夫に取り組む必要性を認識していると言える。ただし, 「当初の目標達成度」に関する回答は簡潔なものであり, どこまで達成できたのか, 達成できていない部分はどういう理由なのかを自省する記述が求められるところであり, 「アピール点」に関しても, 依然, 「特になし」とする回答が散見される。
- ③ なお, 担当授業の改善を超えて, コースワーク的なカリキュラムへの改善, 成績評価の改善を指摘するような回答も継続的にある。具体的には, 目的意識が異なる学生の存在, 履修順序の逆転した学生 (例えば, 関連するベーシック科目, アドバンスト科目を修得したにもかかわらず, 修了単位数を満たすためにコア科目を履修する学生) の存在, あるいは理解度の異なる学生 (関連するコア科目・ベーシック科目を履修していない学生, 履修していたとしてもその理解度が異なる学生) の存在に苦慮しているとの回答, 担当科目が筆記試験・相対評価にはなじまないとの回答である。
- ④ 教員の担当科目自己評価表の提出時期は, 現在, 学生による授業評価アンケートと同時期になっているが, 本来, 教員の自己評価は, 試験結果と学生アンケートとを見ながら, 「気付き」を語るべきではないかという考え方もある。あるいは, 今までどおり, 同時期に行うのであれば, 自己評価と学生評価・試験結果との突合せを行うなど

のフィードバックをする必要があるのではないだろうか。

5. まとめと残された問題

学生による授業評価アンケートと担当教員による授業自己評価アンケートは、2005年度IBA開設以来6つの学期（2005年度春学期・秋学期、2006年度春学期・秋学期及び2007年度春学期・秋学期）にわたって同じ設問によって実施されてきた。したがって、各アンケート設問に対する回答結果をもとに時系列分析を行うことが可能である。しかし教員による授業自己評価アンケートは自由記述形式のため、単純な数値的分析にはなじまない。経営戦略専攻企業経営戦略コースと会計専門職専攻のいずれについても、本報告書のなかでアンケート結果の時系列分析を実施しており、これがひとつの特色となっている。

本年度秋学期の特色として、学生による授業評価アンケートの結果がほぼすべての項目において順調に伸びていることが、経営戦略専攻（企業経営戦略コース）と会計専門職専攻のいずれからも指摘されている。例年と同じく「教員の授業内容と方法」に対する評価は高評価で安定しており、教員が専門知識を活かしシラバスに沿って相当な授業準備を行って授業に臨んでいることが窺える。「学生への内容理解度への考慮」「学生の発言・議論への配慮」についても漸次改善されているが、「教員の授業内容と方法」に比べると相対的に低い評価であり引き続き改善の余地が残る。一方、両専攻ともに学生の二極化傾向にある中で、授業運営上、一定水準に達していない学生層にどのように対応すべきか検討の余地が残る。「授業内容と時間配分に適正」についても前回よりも改善されているが、依然として教員側の改善余地が残されている。教員側からは、2単位の授業時間設定では不十分であり単位数・時間数を増加させて欲しいとの要望もみられる。「学生自身の取り組み」（「学習への事前準備」）についても4.0ポイントに達成している項目がみられ、学生の取り組みにも全般的に若干の改善傾向がみられる。「授業に対する満足度」についても前回調査よりも改善傾向がみられるが、「授業の全体的評価」改善への取り組みが今後必要であり、これは、一つに「学生の取り組み」に対する教員の対応に関わっているとの指摘がある。

両専攻ともにコア科目、ベーシック科目、アドバンスト科目の関連性が高まっている数値結果がでていいる。特に、経営戦略専攻（企業経営戦略コース）での数値は向上している。教員相互間の関係や担当科目での改善が、科目間の関係を強める好結果につながっていると解釈ことも可能であろう。

教員による自己評価に関して、困難な問題ではあるが次のような点について今後検討を要すものと思われる。

1. 成績評価の改善（評価基準のある程度の統一）
2. 担当授業の改善を超えてコースワーク的なカリキュラムへの改善
3. 教員の自己評価表の提出時期は、学生による授業評価アンケートと同時期になっているが、本来は試験結果と学生アンケート結果とを見ながら、「気付き」を語るべきではないか。現行どおり同時期に実施であれば、自己評価と学生評価・試験結果との突合せを行うなどのフィードバックをする必要がある。

これら以外にも、過年度の授業評価アンケートや授業自己評価アンケートの結果から、的確な履修モデル体系の構築とその運営のあり方、履修科目と受講学生の反応に差異があることから、入学時のオリエンテーション指導のやり方などの課題が指摘されている。

2007年授業において初めて、①専任教員相互授業参観と授業担当教員と参観者による意見交換会、②教授法に関する研修会、が実施された。残念ながら①に関して多くの教員が参加するまでには至っていない。②に関してはケーススタディ授業法に定評のある他大学教員がモデル授業を公開し、10名近い教員が参観し意見交換会に臨んだ。今後も継続して他大学を含めた教員によるモデル授業の実施と意見交換を行うべきである。2006年度春学期の「授業評価アンケート結果報告書」以降に明記されている授業評価の実施過程のなかで、「評価で特に優れた教員については、これを表彰する」、いわゆるベスト・ティーチャー賞の創設についても提言されている。教育研究水準の継続的な向上を図るためにも、授業評価・FD部会は当該表彰制度の創設について具体的な検討を行い、その創設に向けて取り組む必要がある。また今後とも、①専任教員相互授業参観と授業担当教員と参観者による意見交換会、②教授法に関する研修会の実施、③ベスト・ティーチャー賞の創設、などの施策を講じて教員の資質向上、教育内容改善に対するモチベーションを高める必要がある。また元来、学生による授業評価は、授業評価アンケートを通じて授業に対する認識やその反応を捉え、その分析結果を授業担当者にフィードバックすることで教員の資質や教育の質的向上を図ることを目的とするものである。このフィードバック効果が十全に果たされるか否かについては、授業評価アンケートの分析結果を手にする授業担当者にかかっている。授業評価アンケートが単に行事的なものに帰することなく、それに込められた目的を達成するためにも、授業評価の実施過程のみならずフィードバック過程においても十分に機能しうるよう授業担当者の意識を高めていく必要がある。

以上

関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科

自己評価委員会 授業評価・FD部会

定藤 繁樹（コンビーナー）

大内 章子

小高 久仁子

中島 稔哲

浜田 和樹

2007年度 秋学期 授業評価アンケート実施授業科目一覧

※2007年度冬季集中科目を除く
 ※2007年度夏季集中科目を含む

授業番号	科目名	クラス	教員氏名	授業期間	曜日	時限	履修者数
経営戦略専攻企業会計戦略コース							
01101 2	企業倫理	2	宮本 又郎	秋前	木	VI	40
01102 3	経営学	3	奥林 康司	秋前	火	VI	16
01103 2	会計学	2	児島 幸治	秋後	金	VI	27
01104 2	経済学	2	新庄 浩二	秋前	土	I	31
01105 2	統計学	2	羽室 行信	秋後	木	VI	18
01106 3	英語コミュニケーション	3	マーク シニア	秋前	水	VI	13
01106 4	英語コミュニケーション	4	マーク シニア	秋後	水	VI	23
02101 2	経営戦略	2	小高 久仁子	秋前	月	VI	29
02101 3	経営戦略	3	小高 久仁子	秋後	火	VI	24
02103 2	マーケティング・マネジメント	2	佐藤 善信	秋前	金	VI	25
02104 2	ファイナンス	2	甲斐 良隆	秋前	土	III	29
02105 2	企業ファイナンス	2	岡田 克彦	秋後	土	III	16
02107	財務諸表分析		青柳 吉宏	秋前	水	VI	28
02108 2	テクノロジー・マネジメント	2	玉田 俊平太	秋後	月	VI	25
02110	生産システム		加藤 直樹	秋前	土	I	12
02111 2	ベンチャービジネス	2	定藤 繁樹	秋前	金	VI	10
02113	統計分析論		杉原 左右一	秋前	木	VI	4
02117 2	上級英語コミュニケーション	2	ジョセフ シーハン	秋前	土	III	6
03102	企業家論		宮本 又郎	秋後	土	VI	30
03103	組織管理		奥林 康司	秋後	木	VI	26
03106	事業システム戦略論		加護野 忠男	秋後	土	III	41
03107	組織管理事例研究		岡本 好央	秋後	土	III	12
03108 2	経営戦略事例研究	2	岡本 好央	秋前	土	III	12
03109	サービス・マーケティング		山本 昭二	秋前	木	VI	13
03111	ブランド・マネジメント		梅本 春夫	秋前	土	VI	34
03112 2	マーケティング・コミュニケーション	2	梅本 春夫	秋後	土	VI	15
03117	国際マーケティング		藤沢 武史	秋後	火	VI	6
03118	マーケティング・リサーチ		中西 正雄	秋後	水	VI	24
03122	金融商品		甲斐 良隆	秋後	月	VI	12
03124	リスクマネジメント		ジョン ホング	秋後	金	VI	5
03125	金融商品取引法		小林 章博	秋前	水	VI	4
03126	金融機関経営		ジョン ホング	秋前	火	VI	6
03130 2	製品開発事例研究	2	服部 宏紀	秋後	土	I	3
03132	eビジネス事例研究		吉田 雅紀	秋後	月	VI	22
03134	ベンチャービジネス事例研究		吉田 雅紀	秋前	月	VI	12
03135	企業倫理事例研究		石田 寛	秋後	月	VI	6
03136	コストマネジメント		窪田 祐一	秋前	水	VI	2
03138	知的財産権法		小南 典子	秋前	土	III	6
03140	企業経営戦略特論B		石橋 陽	秋前	水	VI	18
03142 3	課題研究基礎	3	定藤 繁樹	秋後	金	VI	8
03142 9	課題研究基礎	9	大内 章子	秋前	土	III	5
03143 1	課題研究	1	宮本 又郎	秋	土	I	8
03143 3	課題研究	3	小高 久仁子	秋	土	I	0
03143 7	課題研究	7	山本 昭二	秋	土	I	3
03143 8	課題研究	8	甲斐 良隆	秋	土	I	4
03143 10	課題研究	10	大内 章子	秋	土	I	7
03143 14	課題研究	14	定藤 繁樹	秋	土	I	10
会計専門職専攻							
51101 3	国際会計論	3	杉本 徳栄	秋前	月	VI	27
51101 4	国際会計論	4	杉本 徳栄	秋後	金	III	12
51102 2	簿記原理	2	小市 裕之	秋前	土	I	13
51103 3	簿記基礎	3	小市 裕之	秋後	土	I	24
51104 3	簿記	3	中島 稔哲	秋前	木	III	15
51104 4	簿記	4	中島 稔哲	秋後	木	VI	22
51105 2	財務会計基礎	2	杉本 徳栄	秋前	土	I	33
51106 3	財務会計論	3	山地 範明	秋前	火	VI	15
51106 4	財務会計論	4	山地 範明	秋後	火	I	21
51201 2	管理会計基礎	2	徳崎 進	秋前	金	VI	20
51202 3	管理会計論	3	浜田 和樹	秋前	金	I	13
51202 4	管理会計論	4	浜田 和樹	秋後	木	III	12
51203 2	原価計算基礎	2	稲澤 克祐	秋後	土	V	18
51204 3	原価計算論	3	徳崎 進	秋前	木	VI	21
51204 4	原価計算論	4	徳崎 進	秋後	木	VI	7
51301 4	会計倫理	4	西尾 宇一郎	秋前	土	III	13
51302 3	監査論	3	西尾 宇一郎	秋前	月	III	26
51302 4	監査論	4	西尾 宇一郎	秋後	土	III	33
51401 2	経済学	2	新庄 浩二	秋前	月	VI	11
51402 3	経営学	3	加藤 雄士	秋前	土	I	17
51402 4	経営学	4	加藤 雄士	秋後	土	I	8
51501 3	企業法	3	岡本 智英子	秋前	火	I	15
51501 4	企業法	4	岡本 智英子	秋前	火	VI	20
51502 2	租税法基礎	2	西尾 宇一郎	秋前	土	V	81
51503 2	法人税法	2	西尾 宇一郎	秋後	土	V	49
52101 2	簿記応用	2	杉本 徳栄	秋前	月	III	12
52102 2	会計基準論	2	中島 稔哲	秋前	木	VI	14
52103 2	国際会計基準論	2	杉本 徳栄	秋後	月	III	7
52104 2	連結財務諸表論	2	山地 範明	秋後	金	VI	33

2007年度 秋学期 授業評価アンケート実施授業科目一覧

※2007年度冬季集中科目を除く
 ※2007年度夏季集中科目を含む

授業番号	科目名	クラス	教員氏名	授業期間	曜日	時限	履修者数
52105 2	会計制度論	2	上田 耕治	秋後	木	I	13
52106 2	国際公会計論	2	稲澤 克祐	秋前	水	VI	5
52107 2	会社法会計論	2	池浦 良典	秋前	火	VI	5
52201 2	予算管理論	2	小菅 正伸	秋前	月	VI	26
52202 1	コストマネジメント	1	窪田 祐一	秋前	水	VI	9
52202 2	コストマネジメント	2	窪田 祐一	秋後	水	VI	13
52203 2	財務分析	2	井上 浩一	秋前	金	VI	27
52301 2	監査制度論	2	上田 耕治	秋前	木	VI	22
52302 2	監査基準論	2	野呂 貴生	秋後	土	V	28
52401 2	経済政策	2	新庄 浩二	秋後	木	III	1
52402 2	財政学	2	稲澤 克祐	秋後	水	VI	26
52404	ファイナンス		甲斐 良隆	秋後	金	III	29
52405 2	経営管理論	2	加藤 雄士	秋前	土	III	29
52406 2	経営財務論	2	徳崎 進	秋前	火	III	16
52407 2	ビジネスコミュニケーション	2	マーク シニア	秋後	水	I	9
52502 2	商法	2	岡本 智英子	秋後	火	VI	14
52503 2	会社法	2	岡本 智英子	秋後	火	I	6
52504 2	金融商品取引法	2	田中 庸介	秋前	土	V	11
53101 2	簿記実践	2	玉山 慶幸	秋前	水	VI	14
53102	英文会計		前原 啓二	秋後	水	VI	31
53106	地方自治体財務会計論		石原 俊彦	秋前	土	III	16
53109	簿記課題研究		中島 稔哲	秋	火	VI	9
53110 3	財務会計課題研究	3	杉本 徳栄	秋	木	VI	9
53111	公会計課題研究		稲澤 克祐	秋	土	I	6
53112 2	財務会計事例研究	2	西田 隆行	秋後	金	VI	7
53114	企業内容開示論		上田 耕治	秋後	木	VI	24
53202	業績評価会計論		浜田 和樹	秋前	木	I	17
53204	地方自治体原価計算論		石原 俊彦	秋後	土	I	18
53206	地方自治体予算管理論		稲澤 克祐	秋前	土	III	9
53207	地方自治体財務分析		石原 俊彦	秋前	土	I	6
53208	管理会計課題研究		浜田 和樹	秋	金	VI	12
53209	原価計算課題研究		玉置 求己	秋	土	III	15
53210	管理会計事例研究		徳崎 進	秋後	金	VI	5
53302	システム監査		木村 安寿	秋前	土	III	20
53307 1	監査事例研究	1	西田 隆行	秋前	金	VI	4
53307 2	監査事例研究	2	池浦 良典	秋後	火	VI	15
53401	地方財政論		稲澤 克祐	秋後	土	III	15
53402 2	経済学詳説	2	三木 潤一	秋後	月	III	1
53403	金融機関経営		ジョン ホング	秋前	火	VI	3
53404	企業ファイナンス		岡田 克彦	秋後	木	III	1
53406	組織管理		奥林 康司	秋後	木	VI	1
53409	コーポレート・ガバナンス		宮本 又郎	秋後	木	III	5
53412	地方自治体ファイナンス		石原 俊彦	秋後	月	VI	25
53413	地方自治体情報システム		羽室 行信	秋前	火	VI	4
53416	地方自治体人事管理論		山中 俊之	秋後	土	I	4
53417	海外行政経営事情		武久 顕也	秋前	土	V	1
53418	地方自治体人材開発論		加藤 雄士	秋後	土	III	14
53501	倒産処理法		田中 庸介	秋後	土	V	12
53502	知的財産権法		小林 恵	秋後	木	III	6
53504 2	企業法要説	2	朝沼 晃	秋前	水	VI	9
53504 3	企業法要説	3	朝沼 晃	秋後	水	III	18
53506	租税法課題研究		西尾 宇一郎	秋	月	VI	17
2007年度夏季集中科目							
01102 2	経営学	2	大内 章子	春	集	集	30
01103 1	会计学	1	児島 幸治	春	集	集	35
02104 1	ファイナンス	1	甲斐 良隆	春	集	集	49
02105 1	企業ファイナンス	1	岡田 克彦	春	集	集	23
02111 1	ベンチャービジネス	1	定藤 繁樹	春	集	集	48
02206	Marketing Management		小田部 正明	春	集	集	11
03112 1	マーケティング・コミュニケーション	1	梅本 春夫	春	集	集	39
03113	マーケティング戦略		佐藤 善信	春	集	集	35
03142 4	課題研究基礎	4	岡田 克彦	春	集	集	5
03142 5	課題研究基礎	5	佐藤 善信	春	集	集	9
03143 4	課題研究	4	佐藤 善信	春	集	集	4
03143 11	課題研究	11	岡田 克彦	春	集	集	3
03143 15	課題研究	15	玉田 俊平太	春	集	集	4
03209	Brand Management		北村 秀実	春	集	集	1
03224	Advanced Topics in Business C		小田部 正明	春	集	集	3
51101 2	国際会計論	2	杉本 徳栄	春	集	集	50
51301 3	会計倫理	3	西尾 宇一郎	春	集	集	42
52408 2	行政経営論	2	石原 俊彦	春	集	集	23
52505 1	租税法実務	1	宮口 定雄	春	集	集	21
53103	中小会社会計論		宮口 定雄	春	集	集	27
53303	監査役監査		木村 安寿	春	集	集	38
53305	行政評価論		稲澤 克祐	春	集	集	37
53415 2	行政経営事例研究	2	武久 顕也	春	集	集	9
53503	信託法		杉浦 宣彦	春	集	集	30

(5) 記述評価項目

a) この授業で良かったところを具体的に書いてください。

b) この授業で変えてほしいところがあれば、具体的に書いてください。

c) この授業に関してほかに気づいたことがあれば書いてください。
